

## 研 究

『母親の育児行動尺度』の作成  
—「子育て期母親役割尺度」からの選定—寺蘭さおり<sup>1)</sup>, 山口 桂子<sup>2)</sup>

## 〔論文要旨〕

本研究の目的は、母親が子どもへ働きかける行動に着目した『母親の育児行動尺度』を作成し、信頼性と妥当性を検討することであった。幼児の母親を対象に、『母親の育児行動尺度』、幼児版 QOL 尺度（親用）と愛着-養育バランス尺度の質問紙調査を実施した。育児行動尺度12項目について、確認的因子分析を行った結果、適合度は許容範囲内であり、3 因子が確認された（「子どもの発達を促すかわり（Cronbach  $\alpha$  =0.83）」、「社会生活に向けての教育（Cronbach  $\alpha$  =0.69）」、「基本的生活習慣の確立に向けての援助（Cronbach  $\alpha$  =0.76）」、「12項目の全体（Cronbach  $\alpha$  =0.84）」）。本尺度と「幼児版 QOL 尺度（親用）」および「愛着-養育バランス尺度」との相関関係の結果から、妥当性が確認された。これらの結果から、本尺度は母親が実際に子どもへ働きかける行動についての評価や、母親への支援の効果の評価の一助になると考える。

Key words : 育児行動, 母親, 子育て期

## I. 緒 言

平成13年から開始された母子の健康水準を向上させるためのさまざまな取り組み「健やか親子21」の最終評価では、子育てに自信が持てない母親の割合は変わらず、子どもの年齢が上がるとともに母親は育児上の困難感も高まる傾向が示され<sup>1)</sup>、「健やか親子21（第2次）」でも引き続き、育児不安の軽減に向けた支援を課題としている<sup>2)</sup>。

母親の育児不安は子どもの QOL (Quality of Life) に影響し<sup>3)</sup>、子どもの QOL が低いと母親は子どもの特性を否定的に捉える傾向がある<sup>4)</sup>。また、母親としてのアイデンティティが未熟であることが、母親の育児不安や子どもの QOL に影響し<sup>3)</sup>、母親としてのアイデンティティの形成には、母親自身が育児に対して効力感を抱くことの重要性が示唆されている<sup>5)</sup>。実際、

乳幼児健診時にフォローを必要とする母親の養育者としての発達は、それ以外の母親よりも有意に低いことから<sup>6)</sup>、母親の養育者としての発達を支えることにより母親の育児不安は軽減され、子どもの QOL が高まるものと推測される。

以上より、母親が実際に子どもへ働きかける行動とそれから推察される母親としての発達をアセスメントしながら、母親の育児行動を支えることが必要であると考える。

母親の実際の育児場面を測定する「子育て期母親役割尺度」（以下、標準版）がある<sup>7)</sup>。この尺度は船橋の親役割の概念を参考に<sup>8)</sup>、実際の子育て期の母親が感じている望ましい育児行動について自由記述を求め<sup>9)</sup>、得られた内容から質問項目を抽出し、質問紙調査により信頼性と妥当性を検証したものである<sup>7)</sup>。標準版を構成する具体的な項目は、子どもへの直接的

Validation of the Scale for “Mothers’ Childcare Behavior” :  
Selected from the Scale for Mother’ Roles in the Childcare Period  
Saori TERAZONO, Keiko YAMAGUCHI

[3144]

受付 19. 5.28

採用 21. 1. 6

1) 埼玉大学教育学部（研究職）

2) 日本福祉大学看護学部（研究職）

なかかわりとしての「子どもの発達を促すなかかわり(17項目)」、「基本的生活習慣の確立に向けての援助(11項目)」、「社会生活に向けての教育(4項目)」と、子どもへの間接的なかわりとしての「子育てや教育に関する費用の管理(3項目)」の合計4因子、35項目からなり、これらの各因子得点は母親としての満足感と関連していることが明らかにされている<sup>7)</sup>。しかし、標準版<sup>7)</sup>の子どもへの直接的なかわりとなる32項目を、母親が実際に子どもに働きかける行動をアセスメントするためのツールとして使用するには項目数が多く、利用しづらいと考えられる。また、母親が実際に子どもへ働きかける行動を支援するためには、母子にとって望ましい育児行動であるかどうかを検討することも必要である。

そこで本研究では、母親の子どもに働きかける行動を標準版<sup>7)</sup>から選定し、その尺度の信頼性と妥当性を確認することを目的とした。

## II. 方 法

### 1. 母親の育児行動を測定する項目の選定過程

#### 1) 質問項目の選定方法

本尺度は、母親が実際に子どもへ働きかける行動を選定することを目指している。そこで標準版35項目<sup>7)</sup>のうち、子どもへの間接的なかわりとしての「子育てや教育に関する費用の管理(3項目)」は除外し、子どもとの直接的なかわりの下位尺度「子どもの発達を促すなかかわり(17項目)」、「基本的生活習慣の確立に向けての援助(11項目)」、「社会生活に向けての教育(4項目)」を合計32項目を分析の対象とした。標準版を作成したサンプル(442人)に愛媛県内の保育所に通う乳幼児の母親56人のデータを追加サンプルとし<sup>7)</sup>、分析した。なお、調査時期について、標準版を作成したサンプルは2013年12月、追加サンプルは2014年12月に実施した。

質問項目の選定で用いたデータの母親の年齢は20~49歳(平均年齢=35.1±5.0歳)、就業形態はフルタイム147人、パートタイム157人、専業主婦165人、未記入29人であった。子どもの年齢は0歳児14人、1歳児19人、2歳児48人、3歳児74人、4歳児89人、5歳児215人、未記入39人であった。子どもの通園形態は保育園が238人、幼稚園が218人、未記入が42人であった。家族形態は核家族408人、拡大家族38人、母子家庭24人、未記入28人であった。

『母親の育児行動尺度』の作成にあたっては、①下位尺度項目内の各項目同士の相関係数が高すぎないこと( $r < 0.8$ )、②主成分分析における第1主成分負荷量が多いこと( $r \geq 0.5$ )、③内容が重複している項目を除外して1因子4項目、合計12項目で構成し、因子数は標準版と同じ3因子とする、④研究者間で、下位尺度内に残った項目がふさわしい内容であるかについて妥当性を検討する、⑤探索的因子分析により因子構造を確認する、⑥Cronbachの $\alpha$ 係数により信頼性について確認することとした。統計処理にはIBM SPSS22.0 for windowsを用いた。

#### 2) 質問項目の選定結果

先述の方法に基づいて、母親の『育児行動尺度』の項目を12項目選定した。選定された12項目の質問項目への回答に対して、標準版と同様に因子数を3に指定し、探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施した。その結果、それぞれの因子は標準版と同様の項目が抽出されたため<sup>7)</sup>、その命名についてもそのままとした(表1)。

下位尺度のCronbachの $\alpha$ 係数は0.83~0.75とおおむね十分な値を示し、信頼性が確認された。また、各下位尺度間に有意な正の相関が認められ( $r: 0.43 \sim 0.57, p < .01$ )、標準版と同様にそれぞれの育児行動は独立して遂行されるのではなく<sup>7)</sup>、相互に関連し合っていることが示された。また、12項目全体のCronbachの $\alpha$ 係数は0.87であった。標準版と同様に全体を一つの尺度として活用することについても信頼性が確認された<sup>7)</sup>。

## 2. 本調査

### 1) 調査対象者

3歳から就学前の幼児をもつ母親。

### 2) 調査方法

2018年7~10月に、関東圏内の保育所と幼稚園へ調査協力の依頼をした。承諾の得られた3園の保護者358人に質問紙を配布した。

### 3) 調査内容

調査対象者の属性：回答者の年齢、性別、職業、家族形態など。

母親の育児行動を測定する項目：先の過程で選定した『母親の育児行動尺度』12項目の、「子どもの発達を促すなかかわり(4項目)」、「基本的生活習慣の確立に向けての援助(4項目)」、「社会生活に向けての教育(4項

表1 母親の育児行動尺度（短縮版）因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）と下位尺度間の相関 (n=498)

因子および項目（12項目）	因子負荷量		
	1	2	3
第1因子「子どもの発達を促すかかわり」 $\alpha=0.83$			
子どもの行動に対し、長い目で見守る	0.80	-0.11	0.00
子どもの思いを十分に受け止める	0.77	0.08	-0.02
子どもの思いに寄り添ったり、共感したりする	0.69	-0.01	0.10
悪い面ばかりに目を向けず、良い面をしっかりほめて伸ばしていく	0.68	0.05	-0.04
第2因子「社会生活に向けての教育」 $\alpha=0.79$			
子どもが、他の人に対して良いことや悪いことをしたとき、相手の気持ちを伝え、思いやりや共感する気持ちを育む	0.14	0.85	-0.09
子どもが社会に出て恥ずかしい思いをしないよう、ルールや礼儀、身だしなみなどを教える	-0.02	0.82	0.03
他人を傷つけたり、命にかかわる危険なことをしないよう教える	0.00	0.66	0.05
子どもにお金の大切さを教える	-0.17	0.43	0.28
第3因子「基本的生活習慣の確立に向けての援助」 $\alpha=0.75$			
食事は子どもが楽しく、おいしく食べられるよう工夫する	0.07	-0.01	0.67
入浴や歯みがきなど、きれいにすることの気持ちよさを楽しく伝える	0.02	0.05	0.60
健康のために生活リズムを整える	-0.06	0.13	0.58
身の回りの自立ができるよう、子どもの発達状況に合わせて手助けをする	0.27	-0.01	0.48
	第1因子	第2因子	第3因子
	第1因子	0.43**	0.56**
	第2因子		0.57**

\*\* $p<.01$

目)」を使用する。5段階評価で回答を求め、各下位尺度の平均値と12項目全体の平均値を算出する。得点が高いほど、育児行動を遂行しているように設定した。

子どものQOLを測定する項目：幼児版QOL尺度（親用）46項目を使用する<sup>10~12)</sup>。これは親が子どものQOLを評価し報告する尺度で、6つの下位領域（「身体の状態」、「心の状態」、「自分自身」、「家族との様子」、「友だちとの様子」、「学校（幼稚園・保育所）生活」）24項目と子どもの状態や親のかかわり方22項目の合計46項目で構成されている。質問項目に対して、この1週間の状態を5段階評価で回答を求め、下位領域ごとの得点と領域すべての総得点を算出し、最高得点が100点になるように換算した。得点が高いほど子どものQOLが高い状態である。『母親の育児行動尺度』と正の相関が想定される。

母親の養育者としての発達を測定する項目：「愛着-養育バランス尺度」30項目を使用する<sup>13)</sup>。この尺度は親の養育者としての発達を「愛着システムから養育システムへのシフト」と捉え、その発達状況を測定する尺度である。愛着と養育を「適応」、「感受性」、「親密性」の3つの視点から捉え、3因子6要素（1因

子5項目）から構成され、7件法で測定される。母親から子どもへの愛着（愛着的因子）とは、母親としての自己意識が形成される途中において、母親は自分自身への関心が強く、母親という存在に対して不安を感じ、支えを必要とし、母親としての不安を子どもの反応をとおして軽減しようとすることである。また、母親から子どもへの養育（養育的因子）とは、子どもに関心を示し、子どものもつ不安や驚異に対して保護し、安心や慰めを与え子どもの不安や脅威を軽減させ、欲求を満たしてあげること、母親としての自分を受容することである。今回は養育者としての発達を全体として捉えるために、「愛着的因子（適応）、（感受性）、（親密性）」15項目の平均値と「養育的因子（適応）、（感受性）、（親密性）」15項目の平均値を算出した。『母親の育児行動尺度』のそれぞれの項目と「愛着的因子（適応）、（感受性）、（親密性）」と負の相関、「養育的因子（適応）、（感受性）、（親密性）」と正の相関が想定される。

#### 4) 分析方法

『母親の育児行動尺度』の確認的因子分析を行い、因子構造を確認し、Cronbachの $\alpha$ 係数により信頼性



について確認した。

『母親の育児行動尺度』の妥当性を確認するために、『母親の育児行動尺度（各下位因子と12項目全体）』と幼児版 QOL 尺度（親用）および「愛着 - 養育バランス尺度」との間にピアソンの相関係数を求めた。

『母親の育児行動尺度（各下位因子と12項目全体）』の対象属性ごとの平均値の差を確認するために、子どもの性別は *t* 検定を、出生順位・母親の就業別は一要因の分散分析を行った。

統計処理には IBM Amos25.0 for windows と IBM SPSS25.0 for windows を用いた。

5) 倫理的配慮

それぞれ保育所・幼稚園の代表者に対しては、説明書と同意書に基づき、研究趣旨を説明した後、研究協力は任意であり、協力しない場合や途中辞退しても不利益を被らないことを説明し、書面にて承諾を得た。調査対象者に対しては、研究参加は任意であり、質問紙調査の場合は質問紙の提出をもって研究への同意とみなすこと、得られたデータは本研究に限って使用すること、および研究結果の公表は個人が特定されないようすることを質問紙の表紙に明記した。なお、本研究は国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：H29-E-10）。尺度使用にあたり、「幼児版 QOL 尺度（親用）」<sup>12)</sup>と「愛着 - 養育バランス尺度」<sup>13)</sup>の作成者より承認を得た。なお、「幼児版 QOL 尺度（親用）」については、KINDL<sup>R</sup>のホームページより使用申込をした（ID：1434）<sup>10)</sup>。

Ⅲ. 結 果

1. 調査対象者の属性

質問紙調査の欠損値のある回答を除く250人（有効回答率72%）を分析の対象とした。対象となる母親の年齢、職業形態、家族形態、子どもの性別、年齢、出生順位については表2に示した。

2. 確認的因子分析の結果

『母親の育児行動尺度』12項目について、因子構造が妥当かを検証するために確認的因子分析を行った。その結果を図に示す。適合度指標適の値は、 $\chi^2 = (51) = 97.4 (p < .01)$ , GFI = 0.94, AGFI = 0.91, CFI = 0.95, RMSEA = 0.06であった。また、『母親の育児行動尺度』について、下位尺度間に有意な正の相関が認められた

表2 対象者の概要 (n = 250) 人数 (%)

回答者の属性		子どもの属性	
母親の年齢		性別	
20～24歳	1 (0.4)	男児	113 (45.2)
25～29歳	11 (4.4)	女児	137 (54.8)
30～34歳	57 (22.8)	年齢	
35～39歳	94 (37.6)	3歳	47 (18.8)
40～44歳	73 (29.2)	4歳	91 (36.4)
45歳以上	13 (5.2)	5歳	84 (33.6)
無回答	1 (0.4)	6歳(就学前)	28 (11.2)
母親の就労形態		出生順位	
フルタイム	47 (18.8)	第1子	133 (53.2)
パートタイム	54 (21.6)	第2子	84 (33.6)
専業主婦	149 (59.6)	第3子	29 (11.6)
家族形態		第4子	2 (0.8)
核家族	216 (86.4)	無回答	2 (0.8)
多世帯同居家族	27 (10.8)		
母子家庭	5 (2.0)		
無回答	2 (0.8)		

( $r : 0.39 \sim 0.76, p < .01$ )。それぞれ Cronbach の  $\alpha$  係数を求めたところ、「子どもの発達を促すかわり（4項目）」では  $\alpha = 0.83$ 、「社会生活に向けての教育（4項目）」では  $\alpha = 0.69$ 、「基本的生活習慣の確立に向けての援助（4項目）」では  $\alpha = 0.76$ 、また、12項目全体の Cronbach の  $\alpha$  係数は  $\alpha = 0.84$ であった。

3. 尺度の妥当性の検討

「幼児版 QOL 尺度（親用）」<sup>10~12)</sup>と「愛着 - 養育バランス尺度」<sup>13)</sup>の Cronbach の  $\alpha$  係数を検討したところ、「幼児版 QOL 尺度（親用）(46項目全体)」では  $\alpha = 0.91$ 、「愛着 - 養育バランス尺度」の「愛着的因子（15項目）」では  $\alpha = 0.85$ 、「養育的因子（15項目）」では  $\alpha = 0.87$ であった。信頼性については Cronbach の  $\alpha$  係数より内的一貫性が保たれていると判断した。

次に、『母親の育児行動尺度』(各下位尺度と12項目全体の平均値)と「幼児版 QOL 尺度（親用）」、「愛着的因子」、「養育的因子」との間のピアソンの相関係数を算出した。その結果、「幼児版 QOL 尺度（親用）」と養育者としての発達の「養育的因子」は『母親の育児行動尺度』の各下位尺度と12項目全体との間には有意な正の相関が確認された。また、「愛着的因子」は『母親の育児行動尺度』の「社会生活に向けての教育」と「基本的生活習慣の確立に向けての援助」との間の相関係数は低かったが、各下位尺度と12項目全体との間には

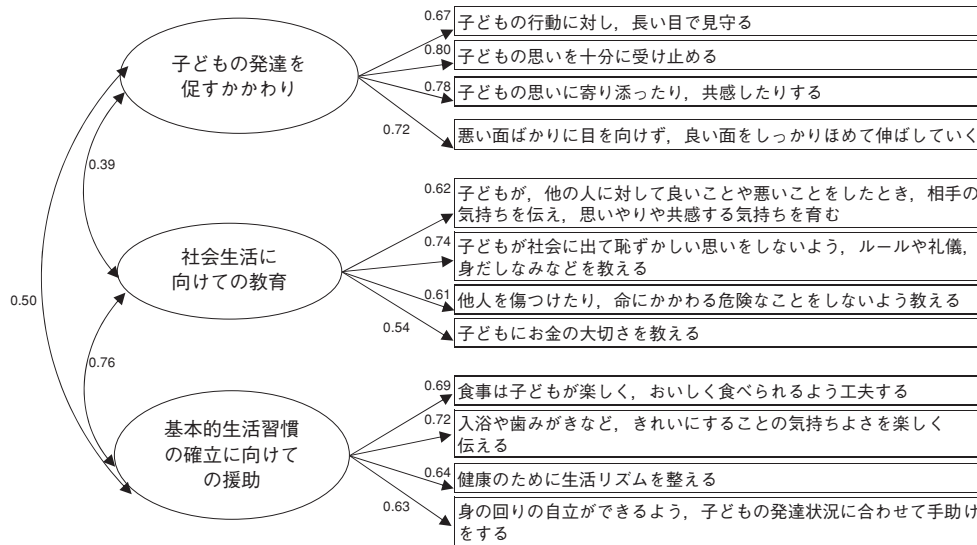


図 母親の育児行動尺度（12項目）の確認的因子分析

表3 母親の育児行動尺度と子どものQOL・養育者としての発達との相関

	子どものQOL	「養育者としての発達」	
		愛着的因子	養育的因子
母親の育児行動尺度全体	0.42***	-0.31***	0.52***
母親の育児行動			
子どもの発達を促すかわり	0.33***	-0.41***	0.48***
社会生活に向けての教育	0.31***	-0.13*	0.37***
基本的な生活習慣の確立に向けての援助	0.36***	-0.18**	0.38***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表4 子どもの性別における母親の育児行動得点の平均値（SD）のt検定の結果

	男児 n=113		女児 n=137	t 値
母親の育児行動尺度全体	3.95 (0.43)	<	4.06 (0.45)	t (248) = 2.10*
母親の育児行動				
子どもの発達を促すかわり	3.62 (0.52)		3.76 (0.62)	t (248) = 1.97
社会生活に向けての教育	4.18 (0.55)		4.31 (0.48)	t (248) = 1.90
基本的な生活習慣の確立に向けての援助	4.04 (0.57)		4.12 (0.60)	t (248) = 1.01

\* $p < .05$

負の相関が確認された（表3）。

4. 子どもの性別・年齢・出生順位・母親の就業別での母親の育児行動の平均値の差の検討

作成された尺度が子育て期の母親の育児行動のアセスメントツールとして使用可能かを検討するために、『母親の育児行動尺度』（3下位尺度と12項目全体）の平均値について、子どもの性別、子どもの年齢・出生順位別、母親の就業別の差を検討した。その結果、子どもの性別において、『母親の育児行動尺度』12項目

全体の平均値には差があり、男児の母親よりも女児の母親の方が育児行動の得点有意に高いことが明らかとなった（表4）。一方、子どもの性別の各下位尺度の平均値には差が認められなかった（表4）。また、子どもの年齢別（表5）、出生順位別（表6）、母親の就業別（表7）において有意差は確認されなかった。

IV. 考 察

1. 『母親の育児行動尺度』の因子構造と信頼性

本尺度は、母親が実際に子どもへ働きかける行動を

表5 子どもの年齢別における母親の育児行動の平均値 (SD) の分散分析の結果

	3歳 n=47	4歳 n=91	5歳 n=84	6歳 n=28	F 値
母親の育児行動尺度全体	4.00 (0.45)	4.00 (0.44)	4.01 (0.43)	4.06 (0.51)	F (3,246) =0.15
母親の育児行動					
子どもの発達を促すかかわり	3.77 (0.56)	3.70 (0.59)	3.63 (0.58)	3.75 (0.58)	F (3,246) =0.70
社会生活に向けての教育	4.12 (0.52)	4.24 (0.51)	4.31 (0.51)	4.32 (0.51)	F (3,246) =1.63
基本的生活習慣の確立に向けての援助	4.11 (0.49)	4.05 (0.56)	4.10 (0.62)	4.11 (0.72)	F (3,246) =0.15

表6 子どもの出生順位別における母親の育児行動の平均値 (SD) の t 検定の結果

	第1子 n=133	第2子以降 n=115	t 値
母親の育児行動尺度全体	4.03 (0.44)	4.00 (0.46)	t (246) =0.53
母親の育児行動			
子どもの発達を促すかかわり	3.75 (0.60)	3.63 (0.56)	t (246) =1.57
社会生活に向けての教育	4.23 (0.49)	4.28 (0.54)	t (246) =0.75
基本的生活習慣の確立に向けての援助	4.10 (0.57)	4.08 (0.62)	t (246) =0.31

表7 母親の就業別における母親の育児行動の平均値 (SD) の分散分析の結果

	フルタイム n=47	パートタイム n=54	専業主婦 n=149	F 値
母親の育児行動尺度全体	4.01 (0.47)	4.00 (0.52)	4.02 (0.44)	F (2,247) =0.49
母親の育児行動				
子どもの発達を促すかかわり	3.71 (0.62)	3.69 (0.59)	3.69 (0.57)	F (2,247) =0.33
社会生活に向けての教育	4.21 (0.55)	4.23 (0.61)	4.27 (0.47)	F (2,247) =0.33
基本的生活習慣の確立に向けての援助	4.11 (0.58)	4.06 (0.63)	4.09 (0.59)	F (2,247) =0.49

選定することを目指している。標準版より選定した『母親の育児行動尺度』を確認的因子分析により因子構造を確認した結果、適合度指標適のCMIN ( $\chi^2$ 値)は、 $\chi^2=(df=51)=97.4$  ( $p < .01$ )であった。この値は有意確率が有意でないほど望ましい結果とされているが、有意であっても問題はないと指摘されている<sup>14)</sup>。そこで本研究では、一般的に0.90以上であれば「説明力のあるパス図である」と判断できるGFIとAGFIで適合度を確認した<sup>14,15)</sup>。その結果、いずれも一定程度の適合度が確認され、本尺度のモデルは受容可能標準に達したと考えた。次いで信頼性を確認した結果、3つの因子のCronbachの $\alpha$ 係数は $\alpha = 0.69 \sim 0.84$ とおおむね十分な値を示していた。また、『母親の育児行動尺度』の各下位因子間に有意な相関が確認されたことから、標準版と同様にそれぞれの子どもへのかかわりは独立して遂行されるのではなく<sup>7)</sup>、相互に関連し合っていることが明らかとなった。さらに、12項目全体のCronbachの $\alpha$ 係数は $\alpha = 0.84$ と高い値を示したことから、標準版と同様に全体を一つとして活用するこ

とについても信頼性が確認された<sup>7)</sup>。このことから本尺度は、母親が実際に子どもへ働きかける行動について全体として一つの尺度として母親の育児行動の評価や母親への支援の効果の評価の一助になると考える。

## 2. 『母親の育児行動尺度』の活用

本研究は、母親が実際に子どもへ働きかける行動を選定することを目指して、標準版<sup>7)</sup>の項目から抽出し、『母親の育児行動尺度』の作成を検討した。実際にアセスメントツールとして使用するためには、母子にとって望ましい育児行動であるかの確認が必要となる。そこで、子どもの生活の質を測定する「幼児版QOL尺度(親用)」と母親の養育者としての発達を測定する「愛着-養育バランス尺度」との関連を確認し、妥当性を検証した<sup>10-13)</sup>。その結果、『母親の育児行動尺度』の各下位尺度と12項目全体は、「幼児版QOL尺度(親用)」と養育者としての発達の「養育的因子」、いずれの尺度との間には有意な正の相関、「愛着的因子」との間には有意な負の相関が認められ、質

問項目の妥当性が確認された。本研究が使用した「幼児版 QOL 尺度（親用）」は、あくまでも親が子どもに関して記入した結果であり、子ども自身の状態については必ずしも一致しない可能性があるといわれているが<sup>12)</sup>、『母親の育児行動尺度』を用いて母親の実際の子どもへのかかわりを確認することにより、子どもの QOL や母親の養育者としての発達状況を推察できる可能性を示唆している。

養育システムが発達するという事は、愛着的因子が養育的因子より低いということを示すという<sup>16)</sup>。実際、乳幼児健診時にフォローを必要とする母親は、それ以外の母親よりも愛着的因子が有意に高く、養育的因子が有意に低いという<sup>6)</sup>。今回、『母親の育児行動尺度』は養育的因子との間に有意な正の相関が認められたことから、本研究の『母親の育児行動尺度』の項目を確認することにより母親の養育者としての発達状況が推察されると考える。

母親としてのアイデンティティが未熟であることが、母親の育児不安や子どもの QOL に影響<sup>3)</sup>、母親としてのアイデンティティの形成には、母親自身が育児に対して効力感を抱くことの重要性が示唆されている<sup>5)</sup>。今回の結果から、本研究で確認された育児行動の遂行を促進する支援が、子どもの QOL や母親自身の養育者としての発達に関連する可能性も示唆している。

また、子どもの性別では、『母親の育児行動尺度』12項目全体の平均値の差が確認されたが、各下位尺度では差は確認されなかった。これは、男児を育てる場合と女児を育てる場合とでは、母親が感じる子どもの行動特徴・養育態度は異なる<sup>17)</sup>ために、育児行動全体では差が認められたと考える。一方、子どもの年齢・出生順位別、母親の就業別では、『母親の育児行動尺度』の各下位尺度と12項目全体の平均値の差は確認されなかったことから、本尺度は子育て期の母親が実際に子どもに働きかける行動をアセスメントするツールの一つとして使用可能であるといえる。

## V. 結 論

乳幼児をもつ『母親の育児行動尺度』は、Cronbach の  $\alpha$  係数によりおおむね信頼性を認めた。妥当性は、「幼児版 QOL 尺度（親用）」と「愛着-養育バランス尺度」との相関関係の確認から、母子にとって望ましい育児行動の項目であることが認められた。また、子どもの性別・年齢・出生順位・母親の就業別

の『母親の育児行動尺度』の3下位尺度と12項目全体の平均値において、子どもの性別は『母親の育児行動尺度』12項目全体の平均値の差が確認されたが、そのほかの差は確認されなかったことから、本尺度は子育て期の母親の育児行動をアセスメントするためのツールの一つとして使用可能であるといえる。今後は、保育所等でのアセスメントツールの一つとして有用性を検討していく必要がある。

## 謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は科学研究費助成事業（基盤研究（C））（課題番号：17K01889）の助成を受けて実施した。

本論文の一部は、第66回日本小児保健協会学術集会で発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 厚生労働省. “「健やか親子21」最終評価報告書. 2013” <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11908000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Boshihokenka/0000034788.pdf> (参照2021-01-15)
- 2) 厚生労働省. “「健やか親子21（第2次）」について検討会報告書. 2014” <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000041585.html> (参照2021-01-15)
- 3) 浅見侑子, 柴田玲子. 子どもの QOL に関連する母親のアイデンティティ―「個」と「関係性」の2側面からの検討―. 子どもの健康科学 2013; 13: 9-16.
- 4) 山口豊一, 松崎くみ子, 柴田玲子, 他. 就学前の「気になる子ども」支援のための包括的スクリーニング尺度作成の試み―日本における Kiddy-KINDL<sup>R</sup> Questionnaire 「幼児版 QOL 尺度親用」を用いて―. 跡見学園女子大学文学部紀要 2013; 48: 173-183.
- 5) 山口雅史. 母親になるということ―母親アイデンティティを巡る考察―. 京都: あいり出版, 2010.
- 6) 武田江里子. 「愛着-養育バランス」尺度短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討―乳幼児健診での〈気になる〉母親との関連から―. 小児保健研究 2014; 73: 783-789.
- 7) 寺蘭さおり, 山口桂子. 子育て期母親役割尺度の作成. 小児保健研究 2015; 74: 491-497.
- 8) 船橋恵子. 現代父親役割の比較社会的検討. 黒柳



- 晴夫, 山本正和, 若尾祐司編. 父親と家族—父性を問う—. 東京: 早稲田大学出版部, 1998: 136-168.
- 9) 寺蘭さおり, 山口桂子. 「母親役割」尺度作成のための予備調査～自由記述式質問紙調査から～. 倉敷市立短期大学研究紀要 2012; 56: 33-40.
- 10) “KINDL<sup>R</sup>” <https://www.kindl.org/> (参照2021-01-15)
- 11) 根本芳子. 幼児版 QOL 尺度—日本における Kiddy-KINDL<sup>R</sup> Questionnaire 「幼児版 QOL 尺度」の検討—. 子どもの健康科学 2012; 13: 47-51.
- 12) 根本芳子. 幼児版 QOL 尺度／幼児版 QOL 尺度 (親用). 古荘純一, 柴田玲子, 根本芳子, 他編. 子どもの QOL 尺度—その理解と活用—心身の健康を評価する日本語版 KINDL<sup>R</sup>. 東京: 診断と治療社, 2014: 12-15.
- 13) 武田江里子, 小林康江, 加藤千晶. 母親の子どもに対する「愛着-養育バランス」尺度の開発 第2報—尺度としての信頼性と妥当性—. 日本看護科学会誌 2012; 32: 22-31.
- 14) 小塩真司. はじめての共分散構造分析—Amos によるパス解析—. 第2版. 東京: 東京図書, 2014.
- 15) 豊田秀樹. 共分散構造分析 [Amos 編]. 第2版. 東京: 東京図書, 2008.
- 16) 武田江里子, 小林康江, 弓削美鈴. 乳幼児を子育て中の母親から子どもへの「愛着-養育バランス」に影響する内的要因—母親の被養育体験と内的作業モデルの影響—. 日本看護科学会誌 2016; 36: 71-79.
- 17) 森下順子, 森下正康. 幼児の気質が母親の行動特徴と養育態度に及ぼす影響. 和歌山大学教育学部紀要教育科学 2006; 56: 43-50.

### 〔Summary〕

This study aimed to establish and validate the scale for behavior of childcare by mothers how they influenced their children. Our questionnaires employed the mother's childcare behavior scale, the infant quality of life scale (for parents) and the attachment-caregiving balance scale. Subjects were 358 mothers of preschool infants. Our factor analysis of answers by 250 mothers confirmed goodness of fit of 12 items of the childcare behavior scale within acceptable range. Further, we extracted following 3 factors: "Relationship to that encourage children's development" (Cronbach's alpha = 0.83), "Education for social life" (Cronbach's alpha = 0.69), and "Help in establishing basic daily habits" (Cronbach's alpha = 0.76). Cronbach's alpha showed 0.84 for all the 12 items. The correlations between three scales validated our scale. Our results suggest our scale is useful to evaluate both behaviors of mothers influencing their children and outcomes of supports provided to them.

### 〔Key words〕

childcare behaviors, mother, childcare period